



その想い



第10号

発行人：谷泰智

29年12月1日発行

★大瀧山の下に護国寺はあります

思い起こせば30年程前、当時は地域の方々による年に数回の草刈りが定まっていた、機械を担いだ地元の方々がゾロゾロとこの大瀧山に登っていかれる姿が確かにありました。しかし、高齢化や時代の流れの影響で次第に山に入る人は減り、近年は道がわからなくなるほどシダが茂り荒れ放題になっていましたが、私が好きでやっている刈り払いや、有志の方々による道作りによって、私が小学生の頃の山の姿ぐらいにはようやく戻ってきたようです。是非、お天気の良い日は大瀧山へ遊びにお出で下さい。



急な崖などの危険な箇所もありますが、それらに勝るとくさんの見どころがあります。(画像：大岩の上から加茂を眺めて、バイカオウレン、護摩壇跡)

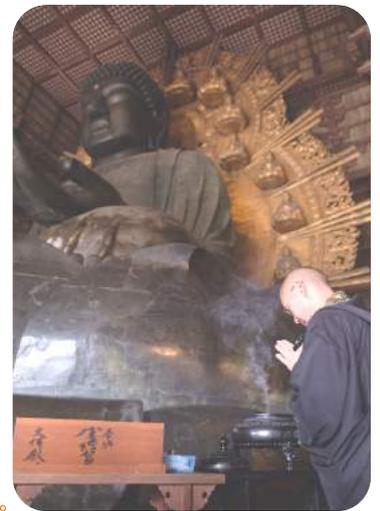
★奈良の大仏にお参りしてきました



高知県仏教青年会の研修旅行で、奈良県にある當麻寺、興福寺、そして奈良の大仏で有名な東大寺に参拝してきました。

特に東大寺では、普段は通常入ることのできない大仏様の蓮台の真下で、宗派の壁を超えた僧侶が共に心を一つにして読経させていただきました。

12月18日(月)午後2時より、帯屋町アーケードにて托鉢をします。



★護国寺特製の御札を納めください

2年前からお配りしております完全オリジナルの御札は日高村産の楮を土佐和紙工芸村の職人でありまた僧侶でも在られる田村寛さんに手漉きしていただいた和紙を使用しております。

地元の自然から作られた和紙を使った御札は、全国的に見ても大変貴重なものです。

来年の干支は戊の戌(つちのえのいぬ)ということで、恒例で住職手書きの字を印刷しております。



山瀧大國佐土

戌 寺 國 護 戌



★回りに向かう

～『南無阿弥陀仏』について～



第7号の終わりで、「次号はナムアマダブツの御念仏について～」と告知していたにも関わらず、ちゃんと果たせておりませんでした。失礼致しました。

私は葬儀の最後には必ず『ナムアマダブツ』の御念仏を唱えております。それも本宗では十念仏と呼ばれているように10回を基本に唱えております。

一般に御念仏と言うと、浄土系の宗派のみがお唱えすると思われがちですが、本宗が総合仏教とも呼ばれる天台宗の流れを汲むことから、日頃葬儀や法事などのお弔いの場で特にお唱えする機会が多いです。

そもそも『南無』とは『ナマス』というサンスクリット語を漢語で音写したもので、南無という字そのものに意味は無く、ナマスの意味が『帰敬』や『帰依』を表します。ですから南無阿弥陀仏とは「阿弥陀仏という仏様に帰依します。」という意味になります。

阿弥陀仏＝阿弥陀如来については以前の寺報で説明致した通りですが、これだけの説明では少々無味乾燥としたもので終わってしまいます。そこで今回は、文字通りこの南無阿弥陀仏に生きた一人の妙好人（浄土信仰に於いての篤信者）、浅原才市の詩をご紹介しながら、御念仏について述べていきたいと思ひます。

(恐れながら以下、才市と表記させていただきます。)

私が才市を知ったのは、学僧時代に仏教学を教えていただいた先生から「鈴木大拙の『日本の靈性』という名著があるからいつかは読んでみなさい。」と勧められたことがきっかけでした。それから同じく鈴木大拙の『妙好人』を読み、そこで紹介されている才市が残した幾つもの詩に私は益々引き込まれていきました。

御念仏について、浄土系の僧侶ではない私があればこれ書くことは本来謹まなければならないことですが、上で述べましたように、私には日々檀家様の前で御念仏を唱えている事実があるわけですから、やはり自分なりの姿勢というか感慨のようなものを以下にしっかり示しておきたいと思うわけです。

さて、右に紹介した才市の詩を読むと、なにか不思議な感覚に包まれますか？

その理由は、才市が清貧な生活の中で自然と到達していた『無分別智』が、この詩の中の『ひとつ』という言葉に籠められているからです。

私は現在、この寺報やホームページなどで、あれこれと長文を書き綴っておりますが、全体を通してわたしが語っていることは、実は大半が無分別智の言い換えです。また、本宗でも思い入れを以て唱えることも多い涅槃経の中の天魔偈にしても、要するに無分別智の境涯を説いているのです。

では、それはいったい何なのか？ それは、『ひとつ』というキーワードをより深めていくと見えてきます。

仏教では、無分別に対して、この世と呼ばれる我々の日常は分別の世界であると言われます。例えば、ものの浄不浄、高い安い、好き嫌い、あなたと私、音楽の中に邦楽があって邦楽の中に演歌があって・・・、さらには〇〇菩薩より□□明王が偉い等々・・・、とにかく全てに分別を付けたがるのがこの世の常です。

そんなこの世に生きる我々は、知らず知らずのうちに物の見方や考え方までもが分別の世界にどっぷりと浸かってしまっているのです。その結果何が起きるかと言うと執着であり、それは分別がある限りどこまでも影のように纏わりついてきます。

しかし、妙好人はその執着という影を完全に払い去った境地に到達していて、その影の無い境地とは、つまり光源である阿弥陀仏に包まれることなのです。

この詩の中に出てくる、『親子』とはそのままに読んでも素晴らしいのですが、元の意味は阿弥陀仏と才市を表しています。本来の光源であるところの阿弥陀仏に照らされて、一心に御念仏を唱え、自らの分別が招く一切の波風の上を、只管に阿弥陀仏の舟におすがりしてその感謝に生きる。そうして唱え続けている御念仏は、もはや自分が唱えているのだという感覚を超越して、そこにはただ御念仏だけがあり、その時、本来無限の可能性を備えている我々凡夫は仏法を体現し、同時に阿弥陀仏に包まれている。それこそが正に『機法一体』の理を顕しているのです。そして、それはただの思い上がりでは決して無いのです。

以上、念仏行の実践も無く、字面を並べただけではただの増上慢に過ぎませんが、私は仏教者の端くれとして、現時点でこのような憧れだけは抱きながら『なむあみだぶつ』をお唱えしております。

子の心、子の心わ親の心よ。親の心、親の心は子の心よ。
親子の心、二つなし、ひとつ心、機法一体、なむあみだぶつ。
なむあみだぶつの外なし。
なむあみだぶつを助けたり、なむあみだぶつに助けられたり、
ごきんうれしや、なむあみだぶつ。

鈴木大拙『妙好人』
p.170,171から引用

★富嶽両界峯入修行のご報告

『檀家さんに聞く』をお休みしまして、前号でお伝えしていた富士山での修行について報告させていただきます。

「^{シュゲンドウ}修験道とは修行を積みその^{ケンタク}験徳を^{ソウロウ}顕わす道にて候。」と言われる通り、修験者の本分とされる山岳修行に身を投じて参りました。この度は、本宗の総本山聖護院門跡の末寺であり、また私の大先輩にあたる宮元隆誠師率いる^{ヤマトシュゲンカイ}大和修験會による、海拔0mから富士山へ登拝する修行に参加してきました。



1日目は富士宮市鈴川海岸での水垢離から始まりました。遙か遠方に霞む富士の山頂を見つめながら道中安全を祈念し、海水に飛び込みました。↓



いよいよ富士の山頂に登拝する3日目、天候は奇跡的に好転を重ね、美しい御来光に照らされながら人生初の標高3000mを超える世界に入りました。



峯入りの前の前行として、麓の吉原商店街を御祈願して回りました。10才の男子は今回が参加3度目の大先輩。



雲海が広がる絶景の上、頂上までもうひと頑張り。声を掛け合い六根清浄、ラストスパートの踏ん張りです。



2日目は標高500mから。瑞々しい原生林が茂る村山古道を通り、標高2500mの山小屋まで12時間以上かけて歩き続けました。



賽の河原を彷彿とさせる山頂の一角。多くの託された想いに感じ入りながら、自分達がここまで登拝叶ったことを感謝し、供養の読経を捧げます。



通常ならこの時期既に登山道は閉鎖され、山小屋も閉まっています。雲海荘さんのご厚意により、我々の為に特別に営業して下さいました。



吉田ルートを一っきに下り星観荘に宿泊。4日目の早朝は小御嶽神社に参拝しました。ここからまた原生林の森を通り、樹海を抜け精進湖を目指します。



早朝3時に起床、ヘッドライトの灯りだけを頼りに溶岩が固まってできたガレ場を黙々と進みます。恐れていた高山病には罹りませんでした。↑



ついに辿り着いた精進湖の端。修行をさせていただいたという感謝の気持ちを胸に刻みつつ、気持ちは日常という次の修行の場に向かっていました。

※ホームページでは詳細な修行記を載せています！



お経のことば

如来の声を聞くと雖も、音声は如来に非ず。
 声を離れて復、如来の等正覚を知らず。

雖聞如来聲 音聲非如来
 離聲復不知 如来等正覚

華嚴経 夜摩天宮菩薩説偈品
 智林菩薩の偈の一節 訳 鎌田茂雄

冒頭でもお伝えした通り、仏教青年会の研修旅行で東大寺に参拝させていただいた御縁に与り、今回は大仏様が造立される拠り所となった經典、華嚴経の一節をご紹介します。

華嚴とは、華で莊嚴（美しくかざられた）されたお経という意味で、つまりそれはこの世界、ひいては、廣大無辺な宇宙と一見対極に思える自己の内面とが、即ち一つであることを説いた深淵な哲学です。

とてつもなく膨大なお経ですので、最初から最後まで読誦されるということはまず無いそうですが、上で紹介している偈（規則的な定型詩）の一つ手前にある唯心偈と呼ばれるものは、東大寺で日常実際に読誦され、写経も盛んにされているそうです。

「仏様の声を聞いたと言っても、声そのものが仏様ではないのだよ。でもかと言って、その声を聞かないことには仏様の悟りもわからないよ。」、何だかもどかしさを感じる上の偈をさらに解り易く言うとそのようになりますが、この偈を読み解くには、かの著名な茂木健一郎博士も提唱するクオリアという概念を用いるのが良いか思われます。

クオリアとは要するに、言語化や数値化できない『感じ』のことであり、またそれは人間だけに備わる『靈性』のことでありと指摘する学者もいます。そしてなにもアカデミックな話じゃなくても、例えば仲の良い夫婦や、阿吽の呼吸のビジネスパートナー、はたまたありふれた馴染の公園のいつものベンチで休憩する当人にしかわからない『その感じ』など、それらを第三者に説明しようにも説明しようがない、そういうもどかしさは誰もがごく自然に抱くものではないでしょうか。

この偈の中で説かれているのは実はそれと同じことで、大好きな歌手の歌声を聴いて感動するから、その歌声の入ったCDこそが当人の感動の本体かと言うと、もちろんそうではなくて、当たり前のことですが当人の心と歌声が相伴って、当人にしかわからない感動が生まれているのです。

逆に言うとレコードやらCDやらも、それがアナログであれデジタルであれ、情報化されたデータに過ぎないのですが、かといってそれが棄却されるべき虚しいものではなく、それは心に感動を興させる大事な媒介なのです。

如来の声を聞くものとその音声、それら二つが即ち一つになって如来の等正覚（悟り）が現れます。それを更に噛み砕いて言うと、悟りが実現された瞬間に声を聞くものとその声は悟りの中で一つになっているのです。いやもっと言うと、悟りに中や外があるわけもなく、その現象が悟りそのものなのです。たとえ一瞬でも我々が優しい気持ちになる時、そこにもはや我々は居らず、ただ優しさだけがあるのです。



お知らせ

● 3月21日（水）祝日 第3回献茶彼岸会

皆様にとって縁の深い故人様に、自らたてたお抹茶を献じるお彼岸の供養会です。今回は新たな趣向を凝らします。

詳細は追ってお知らせ致しますのでお楽しみに。(^^)/

● 毎月28日 柱源護摩供

柱源護摩供は午前9時と午後3時の2回、参加費等無料です。

※葬儀が重なると変更される場合があります。

本山修験宗 大瀧山 護国寺
 781-2155
 高知県高岡郡日高村九頭291
 ☎ 0889-24-7244
 ホームページ gokokuji.site
 仏事に関してのお悩み、ご質問、
 行事に関するお問い合わせ等、
 お気軽にお電話ください。

